

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	「国際社会学」の到達点
Sub Title	
Author	塩原, 良和(Shiobara, Yoshikazu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.69- 70
Abstract	
Notes	特集2: 「国際社会学」の到達点
Genre	Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0069

特集 2 : 「国際社会学」の到達点

塩原 良和

「国際社会学」という呼称が日本の社会学で使われだしたのは 1980 年代だったとされるが、それが学問領域として定着したきっかけのひとつは、1992 年に初版が出版された梶田孝道編『国際社会学』（名古屋大学出版会）であった。当時、社会変動論・地域研究的なアプローチからトランスナショナルな社会現象を探究するこの領域に魅力を感じ、研究を志した大学生・大学院生たちのなかには、今では若手・中堅の研究者としてアカデミズムのなかに地歩を占めるようになった者も多い。

それから今日に至るまで、グローバリゼーションの拡大・深化はとどまるどころを知らず、国家・社会・地域・自己のあり方は急速に変容し続けている。しかし「国際社会学」が社会学のひとつの領域としてどれほど成熟しえたかは、議論の余地がある。いっぽうで、社会変動研究としての「国際社会学」の理論的パースペクティブをより洗練させることを目指す研究者たちがいる。他方で、地域研究としての「国際社会学」をより実証的に精緻化していこうとする研究者たちがいる。そのはざまに、「国際社会学」は揺れ動いているようにもみえる。はたして「国際社会学」はこれまでどのような来歴を歩み、これからどこを目指そうとしているのか。

こうした問題意識から、筆者は 2009 年 7 月 12 日に開催された三田社会学会大会のシンポジウムⅡ『「国際社会学」の到達点』を企画・開催した。当日は国際社会学に携わってきた 4 人の研究者たちが、それぞれの立場から国際社会学という領域の理論・方法論を再考し、その課題と可能性を展望した。梶田編『国際社会学』を学部学生の頃に読み、国際社会学へと誘われた世代に属する塩原と木村真希子氏（明治学院大学）は、それぞれが辿ってきた研究の道筋のなかから国際社会学という学問領域に対して改めて問題提起を行った。オーストラリア地域研究・多文化主義研究に取り組んできた塩原は、「国際社会学」が追究してきた「国民国家の相対化」という理論的アプローチがはらむ問題性を提起するとともに、移住者や外国人、少数・先住民族といったマイノリティ当事者と出会うことから生じる「実践」への要請や希求に対して、国際社会学の研究者がいかに向き合うべきかを問いかけた。インド北東部をフィールドにエスニック問題を研究してきた木村は、いわゆる第三世界の地域研究を従来の国際社会的アプローチから行うことの可能性と限界を論じた。

ふたりの若手研究者の問いかけに応答するかたちで、今日の国際社会学の屋台骨を担う存在である小井土彰宏（一橋大学）、石井由香（立命館アジア太平洋大学）両氏に、国際社会学という研究領域の現状と課題についてそれぞれの見解を述べていただいた。その後、フロアを交えて活発な討論が行われた。本特集は当日の報告やコメントをもとにして構成されたものである。

なお当日の質疑応答の成果が反映された結果、各論稿はシンポジウム当日の報告から若干変更されている。

「国民国家の相対化」のあり方の探究という国際社会学の掲げる命題は、いまだアクチュアリティを失ってはいない。しかし、グローバル化や高度近代といった社会変動への注目は、もはや「国際社会学」という領域をこえて社会学に広く共有されるようになっている。そのなかで国際社会学はどのような理論的独自性を打ち出し、どのようにして実証的・実践的意義を持ち続けることができるのか。この特集を契機として議論が生まれれば幸いである。

(しおばら よしかず 慶應義塾大学法学部)